

## 唐招提寺と鑑真和尚

鑑真（688年 - 763年）

仏教伝来から 200 年が過ぎた 8 世紀半ば、奈良時代に入ると戒律の重要性が徐々に認識され始め、出家すれば免税される為民衆が勝手に僧籍に入るなど日本の仏教界は大いに乱れ墮落の兆しを見せました。授戒の制度を整備する必要性が高まっていた。仏教の戒律を正しく指導できる人物を招くこと、聖武天皇の密命を帯びた。栄叡（ようえい、生年不詳 - 749 年）と普照（ふしょう、生没年不詳）は、授戒できる僧 10 人を招請するため渡唐し、戒律の僧として高名だった鑑真のもとを訪れ日本に来ていただくようお願いした。

鑑真一行は 5 度の日本への渡航を試みるが、6 度目にしてやっと渡航が出来た、渡航は全て密航であった。日本の地を踏んだ時鑑真は既に 60 歳半ばにさしかかり視力さえ失っていました、計画から 10 年の歳月が掛かり、36 名が亡くなっている。これまでにしての鑑真の真意と仏教の偉大さに心を打たれる。鑑真が不撓不屈の精神と身体で利他行に精を出す様子は、本当に頭が下がります。

### 渡航履歴

第一次 743 年 仲間割れ

第二次 743 年、年末長江の河口出て直ぐ船大破遭難した。寧波の阿育王寺で休養する。

第三次 744 年、栄叡が鑑真を日本に連れ去ろうとしているという越州の僧の訴えが役所に届けたため栄叡が拘禁されたため。

第四次 744 年の冬、鑑真の高弟で揚州にいた靈祐が、師匠が去るのを惜しんで密告。

第五次 749 年、嵐に会い海南島漂流

第六次 753 年 11 月 10 日出航 12 月 20 日鹿児島県坊津町秋目に漂着（普照の船は潮岬に年を越えてから漂着）（第一次計画から振り返ると 36 人が亡くなっています）754 年 2 月 1 日、鑑真一行は年が変わって北九州を発ち船で瀬戸内海を通り難波津着く。

2 回目の試みは 744 年 1 月、周到な準備の上で出航したが激しい暴風に遭い、一旦、明州の余姚へ戻らざるを得なくなってしまった。

5 回目の渡日を決意する。6 月に発航し、舟山諸島で数ヶ月風待ちした後、11 月に日本へ向かい出航したが、激しい暴風に遭い、14 日間の漂流の末、遙か南方の海南島へ漂着した。

6 回目 753 年に遣唐使が帰日する際副使の古麻呂は密かに鑑真を乗船させた。11 月 10 日に遣唐使船が発航、ほどなくして暴風が襲い、清河の大使船は南方まで漂流したが、古麻呂の副使船は持ちこたえ、12 月 20 日に薩摩坊津に無事到着し、実に 10 年の歳月を経て仏舍利を携えた鑑真は宿願の渡日を果たすことができた。

遣唐使船に同乗し、琉球を経て天平勝宝 5 年（753 年）12 月、薩摩に上陸した鑑真は、翌天平勝宝 6 年（754 年）2 月、ようやく難波津（大阪）に上陸した。同年 4 月、東大寺大仏殿前で、聖武太上天皇、光明皇太后、孝謙天皇らに菩薩戒を受け、沙弥、僧に具足戒を受けた。鑑真は日本で過ごした晩年の 10 年間の内、前半 5 年を東大寺唐禅院に住した後、天平宝字 3 年（759 年）、前述のように、今の唐招提寺の地を与えられた。大僧都に任じられ、後に大和上の尊称を贈られた鑑真は、天平宝字 7 年（763 年）5 月、波乱の生涯を日本で閉じた時に 76 歳であった。

### 鹿児島南薩摩市坊津町秋目の鑑真和尚記念館



鑑真和尚記念館



記念館内には鑑真和尚の坐像



記念館の上がり口にも坐像



鑑真和尚の秋目の漂着地の全景



この岩場に漂着したとの事



「鑑真大和上湊滄海遙来之地」の碑



野間岳 鑑真が見た本土の地（標高 591m）

唐招提寺の寺地は平城京の右京五条二坊に位置した新田部親王邸跡地で、広さは4町であった。

『招提寺建立縁（『諸寺縁起集』所収）に、寺内の建物の名称とそれらの建物は誰の造営によるものであるかが記されている。

それによると、金堂は鑑真の弟子でともに来日した如宝（?-815年）の造営、食堂（じきどう）は藤原仲麻呂家の施入（寄進）、絹索堂（けんさくどう）は藤原清河家の施入であった。また、講堂は、平城宮の東朝集殿を移築改造したものであった。金堂の建立年代には諸説あるが、おおむね8世紀末と推定され、鑑真の没後に建立されたものである。

伽藍造営は鑑真の弟子の如宝、孫弟子の豊安（ぶあん）の代にまで引き継がれた。平安時代以後、一時衰退したが、鎌倉時代の僧・覚盛（かくじょう、1193年-1249年）によって復興された。

### 【招提】とは

唐招提寺の唐は唐僧たちが多く住んでいたことから付いている、招提は、本来は梵語でチャトルデイシャを漢字に移して『**拓闢提奢**』といい、其れを少し誤って二字につめた語です。意味は、各地から集った**僧たちの住む所**ということです。つまり僧たちに、**衣食を提供する施設**でした。中国にも、『招提寺』と名づけた寺が建てられています。例えば六世紀、南朝の染で建てられた招提寺の場合は、その趣旨が『十方僧の為め、招提寺を建立す』と記されています。（『広弘明集』卷二八、染簡文帝「人の為に作る造寺の疏」）。

これは、次のような唐招提寺の創設理由と、全く同じとあってよいでしょう。

【和上、官館を改めて以って精舎と為し、田疇を廻らし以って僧供に宛つ。一如の芳訓を聞かにして、始めて恵炬を津挙げ、十方の衆を招いて、悉く香饌に飽かしむ。故に号して招提と日う。】

### 【金堂】

正面7間、側面4間で奈良時代建立の寺院金堂としては現存唯一のものである。元禄6年-7年（1693年-1694年）に修理されている。寄棟造、本瓦葺きで、大棟の左右に**鷗尾**（しび）を飾る。このうち西側の鷗尾は創建当初のものである。堂内には中央に本尊・廬舎那仏坐像、向かって右に薬師如来立像、左に千手観音立像の3体の巨像を安置するほか、本尊の手前左右に梵天・帝釈天立像、須弥壇の四隅に四天王立像を安置する（仏像はいずれも国宝）。廬舎那仏、薬師如来、千手観音の組み合わせは他に例がなく、經典にも見えないことからその典拠は明らかでない。東大寺（本尊は廬舎那仏）、下野薬師寺、筑紫観世音寺を「天下三戒壇」と称するが、唐招提寺の三尊は廬舎那仏・薬師・観音の組み合わせで天下三戒壇を表しているとする説もある。

# 唐招提寺



唐招提寺の石碑 平城京から移築講堂中国の大明寺にも全景が同じ伽藍 中国を代表するような鴟尾



金堂内の正面には本尊弥勒如来坐像

左手には千手観音立像

右に薬師如来立像



正面より右には鼓楼に後方は礼堂

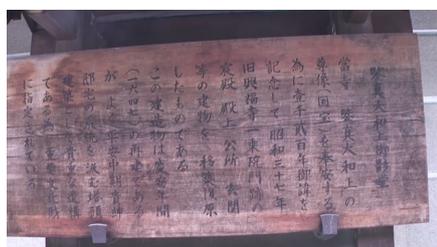
左には鐘楼（中国は左右が反対）

見事な裏の隧道歩くと・・・



唐招提寺本坊

本房内の庭園には今がまっ盛りの蓮



鑑真大和上御影堂と記されています、中には入れません。



戒律を授ける場所 戒壇外相（かいだんげしょう）と書かれています。 鑑真和上に住まい跡が見られる



鑑真和上の御廟に向かう道のり



御廟



こんもりとし木々に囲まれた御廟

**鑑真**（がんにん、鑒真、鑑真、688年（持統天皇2年） - 763年6月25日（天平宝字7年5月6日））は、奈良時代の帰化僧。日本における律宗の開祖。俗姓は淳干。

**鑑真と戒律の揚州江陽県の生まれ。**14歳で智満について得度し、大雲寺に住む。18歳で道岸から菩薩戒を受け、20歳で長安に入り、翌年弘景について登壇受具し、律宗・天台宗を学ぶ。律宗とは、仏教徒、とりわけ僧尼が遵守すべき戒律を伝え研究する宗派であるが、鑑真は四分律に基づく南山律宗の継承者であり、4万人以上の人々に授戒を行ったとされている。揚州の大明寺の住職であった742年、日本から唐に渡った僧栄叡、普照らから戒律を日本へ伝えるよう懇請された。奈良には私度僧（位を持たないインチキ坊主）が多かったため、伝戒師（僧侶に位を与える人）が必要であり、聖武天皇は優秀な僧侶を捜していた。

仏教では、新たに僧尼となる者は、戒律を遵守することを誓う必要がある。戒律のうち自分で自分に誓うものを「戒」といい、サンガ内での集団の規則を「律」という。戒を誓うには、10人以上の正式の僧尼の前で儀式（これが授戒である）を行う必要がある。これら戒律は仏教の中でも最も重要な事項の一つとされているが、日本では仏教が伝来した当初は自分で自分に授戒する自誓授戒が行われるなど、授戒の重要性が長らく認識されていなかった。しかし、奈良時代に入ると、戒律の重要性が徐々に認識され始め、授戒の制度を整備する必要性が高まっていた。

栄叡と普照は、授戒できる僧10人を招請するため渡し、戒律の僧として高名だった鑑真のもとを訪れた。栄叡と普照の要請を受けた鑑真は、渡日したい者はいないかと弟子に問いかけたが、危険を冒してまで渡日を希望する者はいなかった。そこで鑑真自ら渡日することを決意し、それを聞いた弟子21人も随行することとなった。その後、日本への渡海を5回にわたり試みたがことごとく失敗した。

**日本への渡海** 初の渡海企図は743年夏のこと、このときは、渡海を嫌った弟子が、港の役人へ「日本僧は実は海賊だ」と偽の密告をしたため、日本僧は追放された。鑑真は留め置かれた。

2回目の試みは744年1月、周到な準備の上で出航したが激しい暴風に遭い、一旦、明州の余姚へ戻らざるを得なくなってしまった。

再度、出航を企てたが、鑑真の渡日を惜しむ者の密告により栄叡が逮捕をされ、3回目も失敗に終わる。

その後、栄叡は病死を装って出獄に成功し、江蘇・浙江からの出航は困難だとして、鑑真一行は福州から出発する計画を立て、福州へ向かった。しかし、この時も鑑真弟子の靈佑が鑑真の安否を気遣って渡航阻止を役人へ訴えた。そのため、官吏に出航を差し止められ、4回目も失敗する。

748年、栄叡が再び大明寺の鑑真を訪れた。懇願すると、鑑真は5回目の渡日を決意する。6月に出航し、舟山諸島で数ヶ月風待ちした後、11月に日本へ向かい出航したが、激しい暴風に遭い、14日間の漂流の末、遙か南方の海南島へ漂着した。鑑真は当地の大雲寺に1年滞留し、海南島に数々の医薬の知識を伝えた。そのため、現代でも鑑真を顕彰する遺跡が残されている。

751年、鑑真は揚州に戻るため海南島を離れた。その途上、端州の地で栄叡が死去する。動揺した鑑真は広州から天竺へ向かうとしたが、周囲に慰留された。この揚州までの帰上の間、鑑真は南方の気候や激しい疲労などにより、両眼を失明してしまう（鑑真が渡日前に失明していたという説は鑑真の伝記である「唐大和上東征伝」を主に論拠としている。しかし、最近の研究では渡日翌年に書かれた東大寺の良弁に經典の借用を申し出た鑑真奉請経

巻状は弟子の代筆説より鑑真の直筆説の可能性が高くなったことから、渡日後も完全には失明はしていなかったとする説もある)。752年、必ず渡日を果たす決意をした鑑真のもとに訪れた遣唐使藤原清河らに渡日を約束した。しかし、当時の玄宗皇帝が鑑真の才能を惜しんで渡日を許さなかった。そのために753年に遣唐使が帰日する際、遣唐大使の藤原清河は鑑真の同乗を拒否した。それを聞いた副使の大伴古麻呂は密かに鑑真を乗船させた。11月17日に遣唐使船が出航、ほどなくして暴風が襲い、清河の大使船は南方まで漂流したが、古麻呂の副使船は持ちこたえ、12月20日に薩摩坊津の秋目に無事到着し、実に10年の歳月を経て仏舎利を携えた鑑真は宿願の渡日を果たすことができた。

なお、皇帝の反対を押し切ってまで日本に来た理由について、小野勝年は日本からの留学僧の強い招請運動、日本の仏教興隆に対する感銘、戒律流布の処女地で魅力的だったという3点を挙げている。それに対して金治勇は、聖徳太子が南嶽慧思の再誕との説に促されて渡来したと述べている。

**日本での戒律の確立** 753年(天平勝宝5年)12月26日、鑑真は大宰府観世音寺に隣接する戒壇院で初の授戒を行い、754年(天平勝宝6年)1月には平城京に到着し聖武上皇以下の歓待を受け、孝謙天皇の勅により戒壇の設立と授戒について全面的に一任され、東大寺に住することとなった。4月、鑑真は東大寺大仏殿に戒壇を築き、上皇から僧尼まで400名に菩薩戒を授けた。これが日本の登壇授戒の嚆矢である。併せて、常設の東大寺戒壇院が建立され、その後761年(天平宝字5年)には日本の東西で登壇授戒が可能となるよう、大宰府観世音寺および下野国薬師寺に戒壇が設置され、戒律制度が急速に整備されていった。

758年(天平宝字2年)、淳仁天皇の勅により大和上に任じられ、政治にとらわれる労苦から解放するため僧綱の任が解かれ、自由に戒律を伝えられる配慮がなされた。

759年(天平宝字3年)、新田部親王の旧邸宅跡が与えられ唐招提寺を創建し、戒壇を設置した。鑑真は戒律の他、彫刻や薬草の造詣も深く、日本にこれらの知識も伝えた。また、悲田院を作り貧民救済にも積極的に取り組んだ。

763年(天平宝字7年)唐招提寺で死去(入寂)した。76歳。死去を惜しんだ弟子の忍基は鑑真の彫像(脱活乾漆彩色 麻布を漆で張り合わせて骨格を作る手法 両手先は木彫)を造り、現代まで唐招提寺に伝わっている(国宝 唐招提寺鑑真像)が、これが**日本最古の肖像彫刻**とされている。また、779年(宝亀10年)、淡海三船により鑑真の伝記『唐大和上東征伝』が記され、鑑真の事績を知る貴重な史料となっている。